

Tag question についての一考察

櫻 井 美智子

0. 義務的に Subject-Predicate Inversion が行われた tag が main sentence の終りに短縮形で付加している sentence, 所謂 tag question について、先づその一般的な形態を考察し、従来構文のみから検討されていた分析を本稿では実際に使用されている context の中で検討する。

資料として、イギリス・アメリカ・カナダの 20 世紀児童文学作品 10 篇¹⁾の中に出てくる tag question の形のもの 216 例を蒐集した。これを先づ tag の Positive・Negative の別に区分けし、更に 1 例ずつ先行の main clause と subject・modal・否定辞の有無等の関係につきチェックした。そして発話された context から判断して tag に intonation mark をつけ、informant check を受けた後 rising・falling の別によって更に分類した。tag question が spoken language に多く見られ、その intonation が sentence 発話の意図、speaker の態度等言外の重要な情報を伝えるからである。informant にアメリカ人 1 名（ミシガン大出身。言語学 Ph. D.）とイギリス人 1 名（ケンブリッジ大出身。英語学 M. A.）を依頼し、特に問題のある tag については、時をへだてて何回かその context の中で発話して貰い、intonation を確めた。

以上の方法で、216 の例文は計 6 種のタイプに分けられ、このタイプ毎に構文を分析した。基底部に compound sentence を想定し、2 つの sentence をその下位におくが、各タイプによりこの sentence の種類は異なる。

1. 0. 先づ一般的な形態と形成について概括してみよう。tag question とは通常 main sentence の終りに modal+n't/modal+subject の短縮された

yes-no question が並列的におかれた文をいい、付加された yes-no question 型の tag は次のように構成される。

1. 先行の main sentence の subject と、person・number・gender において一致する personal pronoun か又は同一の pronoun (繰返し) を subject とする。
2. main sentence に modal がある場合は通常同一の modal を用い²⁾、modal がない場合は先行の main verb と person・number・tense において一致する *do*-auxiliary を用いる。
3. tag は一般に main sentence が positive statement の時は negative に、negative statement の時は positive となる。negative tag の場合通常 contracted form の *n't* が modal 又は *do*-auxiliary に付けられ、subject の前におかれる。*not* が contract されない場合は subject の後にくるが、この形の使用頻度は *n't* より低い。

It's really too bad, isn't it? (*D. L. L.*, p. 25, l. 4)

You will have to go too, won't you? (*S. G.*, p. 97, l. 2)

I had to do something, didn't I? (*S. of D. D.*, p. 95, l. 1)

.....but I am too sleepy. I am always making this an excuse, am I not? (*D. L. L.*, p. 143, ll. 3-4)

- 1.1. tag の否定辞は *n't* (又は *not*) に限られるが、statement では *never*, *scarcely*, *seldom*, *no*+Noun など使われる。その場合の tag は positive である。

I never told you, did I? (*D. L. L.*, p. 175, l. 25)

No one could mind my having it, could they? (*S. G.*: p. 94, l. 24)

But there is nothing comforting in having your hair cut off because you've dyed it a dreadful colour, is there? (*A. of G. G.*, p. 182, ll. 5-6)

- 1.2. アメリカ英語・イギリス英語のいくつかの corpus に基づいて書かれた Quirk, *et al.* (1985) は、*may* をもつ positive statement に付加される

negative tag の場合, *mayn't* は稀 (アメリカ英語では事実上見当らない) であり, *mightn't*, *can't*, *won't* (future を refer している場合) を代用するものもいるが, 明白な解決はない, としている³⁾。

I may call you James, { *?mayn't I?*
mightn't I?
can't I?
won't I? (future を refer している場合)

について informant の 2 人にただしたところ, アメリカ人は「自分の idiolect ではこのような表現はせず, May I call you James? を使う。may, might, 又は ought のある statement は tag をとらない」という見解であったが, イギリス人は「この文の可能性は充分ありうるし (you 自身が James と呼んでおり I もそう呼んでよいかの場合と, 第 3 者がそう呼んでいるので I が permission を求める場合), これらの tag の使われる可能性は *can't I?* *mightn't I?* の順で *mayn't I?* は非常に稀である」という。尚

He might come after all, mightn't he?

のように statement に *might* がある場合は, tag は *mightn't* だけである。

1.3. その他の modal でその使い方にかなり巾のあるものに *ought*, *have to* などがある。

I ought to be able to neutralize that hole with good strong ammonia, { *oughtn't I?* (D. L. L., p. 81, ll. 22-23)
didn't I?

この 2 つの選択が現在一般的のようであるが,

I suppose I ought to be glad I've got legs to hurry with, *hadn't I*, Mrs. Snow? (P., p. 70, ll. 1-2)

があり, アメリカ人 informant は, 古い用法で今はこのような tag は使わないとしながら, 敢えていえば *shouldn't I* だろう, とのことであるが, イギリス人 informant によれば, これは *hadn't ought to* の省略形で, 一般的ではないが使う人がおり, sub-standard でも古い用法でもない, という。

But if you have big ideas you *have to* use big words to express

them, { *haven't you?* (A. of G. G., p. 19, l.)
 { *don't you?*

need については当然のことながら, modal として使われる時は *need* を, verb の時は *do* -auxiliary になる。

I *needn't* stay in the dark all my life, if I am sick, *need I?* (P., p. 60, ll. 6-7)

You *needed* weapon, *didn't you?* (B. of T., p. 64, ll. 25-26)

1. 4. main sentence の subject が 1st person singular で verb が主観的精神状態を表わすもの又は performative verb で Present tense である場合, tag を後続させることはできない。

*I love to listen to Mozart's music, don't I?

*I'm exhausted, ain't I?

*I'm conscious of the rights of women, ain't I?

*I name this dog Blackie, don't I?

しかし subject が 1st person singular でも verb が次に示すもののいずれかの Present tense で *that*-clause が後続する時は, main clause に対して tag はつかないが, *that*-clause には付加することができる。

believe, expect, fancy, guess, imagine, intend, know, notice,
see, suppose, think, understand, want;
appear, seem, be likely, be sure

I suppose they'll take her back, won't they? (A. of G. G., p. 42, ll. 9-10)

I guess it wasn't a boy that took the Avery scholarship, was it?

(A. of G. G.: p. 241, ll. 3-4)

当然のことであるが, main clause の statement が negative の時は, *that*-clause は subordinate であるのでその negation の scope 内にあり, tag は positive となる。即ち *that*-clause に否定辞があったのが main clause に繰上げられたと考えることができよう。先の例を使うと,

I don't guess it was a boy that took the Avery scholarship, was it ?

(=I guess it wasn't a boy that took the Avery scholarship, was it ?)

であり, tag が positive であることに変わりはない。

2.0. 次に intonation を考察してみよう。tag question の先行の statement は falling intonation で, tag に移る前の comma のところで pause をとり (pause の長さの差異も観察されるが), tag では rising になる場合 (次の例の i と ii) と falling になる場合 (iii と iv) がある。

- i He likes his job, doesn't he ?
ii He doesn't like his job, does he ?
iii He likes his job, doesn't he ?
iv He doesn't like his job, does he ?

tag question に statement が先行していることは, もともと肯定・否定いずれかの片寄りをもつことを意味するわけで, 上に挙げた 4 つの場合でも, statement が positive (i と iii) の時は肯定的片寄りを, negative (ii と iv) の時は否定的片寄りをもっている。その上同じ構造をもつ tag question であっても intonation は 2 つの可能性があり (i と iii, ii と iv のように), 両者の間には明確な意味, 用法の差異が観察される。

即ち tag が rising の場合は statement の命題が真であると願ってはいるが確信しておらず, 相手に確認を求める, つまり information-seeking である。次の例は “No, she doesn't.” を願いながら response として “But she does.” という information を得ている。

“She herself doesn't know yet——of course——does she ?

“But she does, sir,” sobbed Nancy. (*P.*, p. 178, ll. 4-5)

これに反して, tag が falling の場合は, statement の命題が真であることに確信があり, 同意とかあいづちを求める, confirmation-seeking である。この場合は先行の statement に合わせて yes 又は no の答が期待され, それ以

外の答は奇異に感じられる。

2.1. 集めた 216 例中 6 例ではあるが以上の 4 タイプと異って, statement も tag も共に positive の場合 (v のタイプとする) がある。

“Here is Mr. Roach, Master Colin,” said Mrs. Medlock. The young rajah turned and looked his servitor over—at least that was what the head gardner felt happened.

“Oh, you are Roach, are you?” he said. (S. G., p. 176, ll. 30–33)

“So this is what Matthew has been looking so mysterious over and grinning about to himself for two weeks, is it?” (A. of G. G., p. 167, ll. 10–11)

“Possibly Mr. Bennett will not appreciate your kind interest! He has—ah—a singular aversion to your sex, I understand. No woman has ever been known to get inside of Mr. Bennett’s house since his sister died twenty years ago.”

“Oh, he is the one, is he?” I said, remembering. (Q. at A. A., p. 27, ll. 19–25)

いづれも tag は rising で, 前に発言されたこと又はその場の状況や推測から暗黙の了解・結論がえられた時などで, 前の発言に対する単なる反応の場合や, 叱責・皮肉・不信などを表わす場合もある。statement の冒頭に *oh*, *so* が来ることが多い。

このように positive—positive のタイプがあるのならば, 当然第 6 番めのタイプとして statement も tag も negative の場合が論理的に可能となるが, 今回集めた 216 例中には該当するものがなかった。このタイプについて Huddleston (1970, p. 221), Hudson (1975, p. 25), Quirk, *et al.* (1972, p. 392) は可能の立場をとっているが, Culicover (1976, p. 136) は非文としている。Quirk らも Quirk, *et al.* (1985, p. 813) ではこのタイプについて実際

尚, positive—positive で falling intonation の場合が imperatives にあり (4.1.), これを vii のタイプとする。vi のタイプがあり得ないという確証が未だないので vi を保留とし, vii を設定し, 論理的に可能なので viii も仮定する。

これより先 Huddleston (1970) は並列的な compound S を基底部におけばかなりうまく行くであろうと, simple S を仮定した Arbin (1969)⁶⁾ の弱点を批判しながら提案しているが, 具体案は示していない。

S. D.: COMP — NP {Tense {Tense {modal} } } —X— COMP —
 —WH *have*
 be

1 2 3 4 5

\Rightarrow oblig.

Condition 1: $2=7, 3=6, 4=8$

— 77 —

条件 1 によって declarative clause と tag clause とが, NP (subject) と modal の語順と \pm WH COMP の値のちがいを除いて完全に基底部で一致していること, このことによって, 一方の clause に Raising, Passive, There-Insertion 等の rule が適用されれば他方の clause にも等しく適用されることになり, 両 clause の派生主語が常に一致することが約束される。条件 2 は Positive-Negative の対極が両 clause 間で逆転することを固定させ, tag の否定辞は, contract される時は第 6 項に chomsky-adjunction で付加し, contract されない時は第 8 項に含まれる。

このような派生過程を想定すると,

1. 基底部の statement が declarative clause なので, 否定辞の *hardly* や *scarcely* があらわれても文法的であり, 且つ条件 2 によって tag は positive になり, 文法的な tag question が生成される。
2. subject が *I* で verb が Present tense の主観的精神状態をあらわすものの時 tag question は不可能であるが, yes-no question も同じ条件下にあるので, 当然基底部で非文となる。
3. declaratives の intonation は falling で yes-no questions は rising であるので, 基底構造で declarative S + yes-no question と想定することは rising tone のタイプの tag question を考える上で自然である。

3.2. tag が falling intonation になると, rising の時のように情報の提供を依頼するのではなく, 先行の statement の命題が真であることを確める又は同意を求める confirmation-seeking であることは 2.0. で述べた。今井-中島 (1978) はこの種の tag の基底部に yes-no question は適当でないとし, rhetorical S (S_2) を当てて先行の declarative S (S_1) とともに S_0 を構成させることを提案しているが, rhetorical question は一般に intonation が rising であり tag の falling の説明にはならないという難点が残る。

4.0. tag が declaratives 以外の sentence に付加される場合を考察してみよう。tag は interrogatives の後には通常付加されないが, imperatives に

も exclamatives にも付加される。

4. 1. imperatives に付加する tag は種類として 2nd person imperatives, 3rd person imperatives, *let* imperatives があり, 先行の main clause に よって tag のタイプも異なる。

通常 2nd person imperatives では main clause に subject はないが, その tag には 2nd person の *you* が, そして *modal* には *will* があらわれる。positive imperatives には 2.0. のタイプ i, iii, v, vii の tag が可能である。

i Open the window, wont you ?

iii Open the window, won't you ?

v Open the window, will you ?

vii Open the window, will you ?

この中では, vii の tag が強要度において最も高く, v, iii になる程弱くなり i の tag が最も低い。今回の data の中には次のような tag もあった。

Keep still, { can't you ? (S. of D.D., p. 125, l. 20)
 { won't you ?
 { will you ?
 { would you ?
 { can you ?
 { could you ?

これについてイギリス人 informant は, 上に示すような他の modal も可能なこと, このような命令は目下の者に対するもので, falling tone で irritation を表すという。Quirk, *et al.* (1985)⁹⁾ は, imperatives と tag が positive で falling の場合 (vii の場合, 又上の例の最後の 4 つの tag) は大変断固たる命令になり不作法と見なされるとして本文では扱っていないが, 実際には使用されている (親が子供に対して等) ので本稿ではタイプ vii として取上げる。

Imperatives が negative の時は, 実際には tag が付加されることは少ないが, positive tag のみ可能である⁹⁾。

iv Don't tell him about it, { will you ?
*won't you

(Hasegawa, 1965, p. 25.)

3rd person imperatives について, Jespersen (1940)¹⁰⁾ はある時は vocative の一種ともとれ, 又そこにいる *some(one) of you* (pl.) であったり, *of you* という partitive phrase に言及しているともとれる場合, と説明しているが, Stockwell, *et al.* (1973)¹¹⁾ は次の例のように *of/ among you* として考え, その tag の subject は *he* でも *she* でも *they* でもなく, *you* であることを示している。

Somebody take off { your
his } coat. (Stockwell, *et al.* 1973, p. 641.)

The oldest of the girls put { your
her } purse down and come here. (*op. cit.*, p. 644.)

The boy over there stand up, will you. (*op. cit.*, p. 647.)

Don't anyone open the window, { will you ?
*won't you ?

(今井-中島, 1978. p. 70.)

次は *let* imperatives であるが, *let's* で始まる場合 (subject が 1st person plural の時) には main clause が positive-negative を問わず *shall we?* の tag のみを付加することができる。

Let's have some more, { shall we ?
*shan't we ?

Let's not have any more, { shall we ?
*shan't we ?

以上いずれの種類の imperatives においても, rising の tag は一般に命令・要求を和らげる役をしており, 依頼・懇願・勧誘など丁寧な表現になり, tag が falling になると rising の時の丁寧さはなく, 無遠慮な依頼・叱責・立腹を含意し, 目下の者に対して使うことが多い。そして nonnuclear

になると(前出の Don't anyone open the window, …の例文参照) 更に強要度が高まる。

4.2. tag 付き imperatives の形式を Huddleson (1970)¹²⁾ は基底部に 2nd person imperatives (S_1) と依頼表現の interrogative S (S_2) を並列的におく と tag が main clause で表現された依頼を強調する効果をもつことの説明 にもなるとしている。この 2 つの sentence で repeat されている verb phrase を次の rule によって S_2 から消去すると,

S. D.: you —IMP —VP — $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{can} \\ \text{will} \end{smallmatrix} \right\} \left(\left\{ \begin{smallmatrix} \text{not} \\ \text{past} \end{smallmatrix} \right\} \right)$ —you—VP
 1 2 3 4 5 6

⇒

S. C.: 1 2 3 4 5 ϕ

Condition : 3=6

となり, Keep still $\left\{ \begin{array}{l} \text{can't you ?} \\ \text{won't you ?} \\ \text{will you ?} \\ \text{can you ?} \\ \text{would you ?} \\ \text{could you ?} \end{array} \right.$

のいずれの modal をとる tag も説明できることになる。

3rd person imperatives に付加する tag の時は, subject は *of / among you* の 3rd person と考えて 2nd person とすれば, 後続の S においても subject が 3rd person でなく *you* になり 4.1. の 3rd person imperatives の tag が生成される。

let imperatives の tag question は, *let* imperative S (S_1) と *shall we*…で 始まる interrogative S (S_2) から成る compound S (S_0) を基底部に想定する。 そうすれば非文の *shan't we*? が派生されることもなく, 又 intonation のタイプも一致する。

4.3. exclamatives に付加される tag はタイプ iii と i であり (但し main

clause は declaratives の時のように falling intonation ではなく nonnuclear である), 相手が同意してくれることを願っている。

iii How pretty the roses are, aren't they?

i What a lovely day it is, isn't it?

verb のない省略された exclamation に tag がつくこともある。

How pretty, aren't they?

What a lovely day, isn't it?

これらの exclamatives を考察すると、感嘆詞の *how* と declaratives の強意語 *so* との分布が殆ど一致し、又感嘆詞の *what* と強意語 *such* の分布も同様であることが認められるので、exclamatives の基底部には強意語 *so* 又は *such* を含む declarative S (S_1) を、tag の基底部には yes-no question (S_2) を仮定し、これらから成る compound S (S_0) を想定する。この S_1 に *much* の Deletion rule, Adjective Shift, Exclamatory Movement をかけて最後に S_2 の verb の右側の X 項を消去すれば、表層の sentence を得ることができる。

5.0. これまで考察して来た tag question の形とよく似ていながら異なる 2 種の tag を挙げよう。1 つは *you*-tag と呼んでよいと思うものである。Positive-Negative の対極は statement と tag が逆の関係であること、tag は yes-no question の型で modal + n't / modal + subject の短縮形であり、statement の modal と同一の modal 又は main verb と person・number・tense が一致する *do*-auxiliary を用いること、tag は rising tone であること (i タイプと同じ) など類似点が多いが、tag の subject のみ異なる。即ち、declarative S の subject は 1st person singular であるのに tag では 2nd person singular の *you* が使われる。

I think it would be so sweet to say "Mother", don't you? (A. of G. G., p. 38, ll. 21-2)

I never heard of anybody being asylumsick, did you? (*D.L.L.*, p. 22, ll. 24-5)

これらは当然

don't you *think it would be*.....?

did you *hear of anybody*.....?

であり, subject の右側の X 項 (イタリックスの部分) を消去した形で, 同意を求めている。

5. 1. もう 1 つの種類は echo-tag と呼ぶべきものである。declaratives の終りに付加し, yes-no question の型をとる。この場合 tag の subject は declaratives と同じで, positive-positive であるが, tag の intonation が falling になり, この点 v のタイプの tag question と異なり, むしろ vii のタイプである。

'Oh, it's you, is it?' asked a fretful voice from the bed. (*P.*, p. 66, l. 6)

'I knew it just as soon as I saw you.'

'Oh, you did, did you?'

'Yes, sir; I saw it in your eyes, you know, and in your smile.'

(*P.*, p. 62, ll. 29-30)

皮肉や驚きを表わしている。

これらの 2 種の tag については以上簡単な紹介にとどめる。

6. 0. これまで main sentence の終りに短縮された yes-no question の形で付加される tag question について tag の intonation をふまえて考察して来た。蒐集した 216 例を 2.0. で示したタイプ別にみると次のような分布になる。

タイプ	対 極	イントネーション	例文数
i	Positive—Negative	Rising	79 (“you”-tag 14 を含む)
ii	Negative—Positive	Rising	58 (“you”-tag 7 を含む)
iii	Positive—Negative	Falling	48
iv	Negative—Positive	Falling	17
v	Positive—Positive	Rising	6
vi	Negative—Negative	Rising	0
vii	Positive—Positive	Falling	8 (“echo” tag 7 を含む)
viii	Negative—Negative	Falling	0
			<hr/> 216

Quirk, *et al.* (1972, 1985) はタイプ v までしか認めていない (Note では vi を論理的に可能としながら実例をみないとしている) が, imperatives につく tag に, Quirk らが vii として取上げなかったタイプ vii (positive—positive で falling) が今回観察された。とすれば falling tone の negative—negative のタイプも論理的には考えられるが, negative の imperatives の後に negative tag は付かないので (4.1.) 恐らくこのタイプの tag question は立証されないであろう。しかし tag は場合によって, rising, falling のいずれでもなく nonnuclear の時もある。この nonnuclear の場合を本稿では独立させず falling の vii に組入れている。

tag question の構造について従来様々な分析が行われたが, 本稿では, tag の intonation の果す役割が大きいことから, 先行の main sentence の種類別や, 単に Positive—Negative というような対極としての rule をこえて intonation を加えた 8 つのタイプを想定し, 分類・分析の視点とした。そして統語上は main sentence と tag の 2 つの sentence を基底部に考えた。

最後に本考察の限界にふれると, data が 20 世紀児童文学作品からとられたということが, 8 タイプの分布のしかたに影響があったかもしれないこ

と、そして主として spoken language で使われる sentence を、母国語話者でないものが intonation を判断する intuition の限界である。

註

- 1) Alexander, L. 1966. *The Book of Three*. Fontana Lions.
Burnett, F. H. 1911. *The Secret Garden*. Puffin Books.
Lewis, C. S. 1954. *The Horse and His Boy*. Puffin Books.
Lofting, H. 1922. *The Story of Doctor Dolittle*. Puffin Books.
Montgomery, L. M. 1925. *Anne of Green Gables*. Puffin Book.
———. *Aunt Cynthia's Persian Cat*. Kinseido.
———. *The Quarantine at Alexander Abraham's*. Kinseido.
Porter, E. H. 1912. *Pollyanna*. Puffin Classics.
———. 1972. *Pollyanna Grown up*. Puffin Classics.
Webster, J. 1912. *Daddy Long-Legs*. Knight Books.
- 2) 本稿 1. 2. 参照.
- 3) Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London, Longman. p. 811, Note [C].
- 4) Huddleston, R. 1970. Two approaches to the analysis of Tags. *J. L.* 6, pp. 215-222.
Hudson, R. A. 1975, The meaning of questions. *Lg.* 51, pp. 1-31.
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*, London, Longman. p. 392.
———. 1985. p. 813, Note.
Culicover, P. W. 1976. *Syntax*. New York, Academic Press.
- 5) Klima, E. S. 1964. Negation in English. In Fodor & Katz (eds.), pp. 246-323.
Burt, M. K. 1971. *From Deep to Surface Structure*. New York, Harper & Row.
Emonds, J. E. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: root, structure-preserving, and local transformations*. New York, Academic Press.
- 6) Arbin, R. 1969. Tag-questions and tag-imperatives in English. *J. L.* 5, pp. 205-214.
- 7) 今井邦彦, 中島平三. 1978. 『文 (II)』現代の英文法, 第5巻. 東京, 研究社.
- 8) Quirk, *et al.* 1985. p. 831, Note.
- 9) Jespersen, O. 1940. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part five. London, George Allen & Unwin, p. 472.
Hasegawa, K. 1965. English Imperatives 『中島文雄教授還歴記念論文集』 pp. 20-28, 東京, 研究社, p. 25.
Huddleston, R. 1970. p. 219.
Quirk, *et al.* 1985. p. 813.
- 10) Jespersen, O. 1940. pp. 470-471.

- 11) Stockwell, R, P. Schachter, and B. H. Partee, 1973. *The Major Syntactic Structures of English*. New York, Holt, Rinehart & Winston. pp. 640–647.
- 12) Huddleston, R. 1970. pp. 218–219.